

東山の終末期古墳

—旭山古墳群—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



旭山古墳群D支群 (南から)

7世紀初めから中頃にかけての時期は、一般的に畿内のほとんどの地域で古墳時代後期を特徴づける群集墳の築造が停止され、わずかに追葬がなされるのみになる。つまり、この時期が古墳時代の終末期である。東山の地にはこの終末期に新たに墓域を得て造営を開始する旭山古墳群がある。

旭山古墳群は東山丘陵のほぼ中央部に形成され、東方は山科盆地を眼下に見渡せるが、他方は阿弥陀ヶ峰などの山塊にさえぎられて

わずかに愛宕山が望めるのみである。古墳群は北端に位置する六条山(標高200m)から南にゆるやかに傾斜する主尾根上と南西に派生する支脈上に合計27基の古墳が分布している。27基の古墳は広い墓域の中で分散して営まれており、A～Eの5つの支群に分かれる。さらに各支群内は2～3基を単位とした小支群に分けることができる。

墳丘は大型の古墳を除いて顕著な高まりはみられないが、墳形が

確認できたのは全て前方がわずかに開く方形である。前方を除く三方に溝を設けることによって方形に区画されている。墳丘規模は、一辺9m前後のものと6m前後のものがある。一方、周溝がなく規模が不明なものもある。

石室は玄室に比べて狭長な羨道^{せんどう}を有する両袖の横穴式石室、狭長な無袖の横穴式石室、長方形に石を組んだだけの小石室がある。

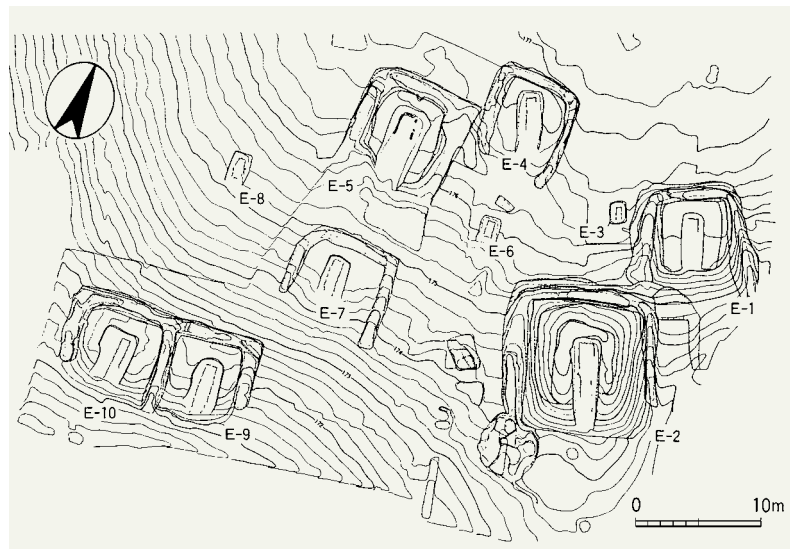
両袖の横穴式石室は玄室長2.4m、同幅1.2m、羨道長3.5m、

同幅 90cm の規模である。天井石はなかったが、もとは架構されていた可能性がある。

無袖の横穴式石室は長さ 2.3 ~ 2.9 m、幅 65 ~ 85cm のものと、長さ 3.4 ~ 3.9 m、幅 75 ~ 90cm の二群に大別することができる。天井石を架構した確実な例がみあたらないことから、棺を石室の上から納めた後ただちに土砂で埋めてしまうか、板材でおおったと考えられる。無袖ではあるが、玄室部と羨道部で造り方が異なり、意識的に区分されていたことが分かる。しかし、玄室部と羨道部の機能としての区分はなく、当初から一棺だけを埋葬するものとして構築されていた。例えば、E-9 号墳には一棺しか埋葬されておらず、追葬が行なわれた痕跡もみられなかった。

小石室は長さ 0.9 ~ 1.7 m、幅 40 ~ 60cm の規模である。箱式石棺と似ているが、一方が開口したり、奥壁に大きめの石を据え付けたりしているのが、横穴式石室の退化したものと考えられる。規模は小さいが成人を葬ったものであろう。

この三種の石室形態は、一般的には両袖の横穴式石室→無袖の横穴式石室→小石室という変遷過程が想定される。しかし、出土した土器などからみて、三種はほぼ同時期に造られたものと考えられる。また、9 m 級の方墳には両袖の横穴式石室、6 m 級の方墳には無袖の横穴式石室、流失してしまうほどの低い封土でしかも周溝をもたないものは小石室を埋葬施設とし



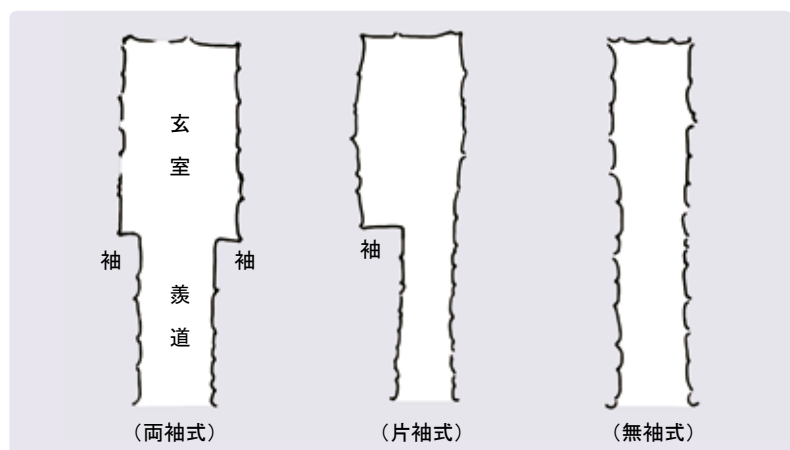
旭山古墳群 E 支群

ており、墳丘規模と石室形態は明らかに対応している。

副葬品の大半は須恵器で、他に土師器・刀子・金環などが出土している。E-9 号墳では遺物が埋葬時の位置を保っており、奥壁に沿って須恵器の台付長頸壺と高杯、羨道部と玄室部の境に須恵器の杯と蓋が 5 組出土し、それらの間に木棺に使用された合計 32 本の釘を検出した。他の古墳の副葬品の内容も基本的に同じだと思われるが、

盗掘などを受けており、明らかにできなかった。小石室からは棺として使用された土師器の甕以外の遺物は出土していない。出土した土器類はおおよそ同時期のもので、7 世紀初めから中頃にあたる。

以上概説したとおり、旭山古墳群は 7 世紀初めから中頃の短期間に造営され、方墳を主体とした単埋葬墓によって構成された古墳群で、終末期の古墳群の一類型となるものである。



横穴式石室の形態

玄室は棺を納める部屋で、羨道は棺を運び入れる通路である（追葬時に羨道にも棺が置かれることもある）。一般的に玄室は羨道より幅を広く造るため、ちょうど玄室と羨道が接する部分が、和服の袖のような形態を示す。これを「袖」と称している。この袖が両側にあるものを両袖式、右か左のどちらか一方にあるものを片袖式、袖のないものを無袖式という。